



Topics

夏休み特別企画 どうぶつ大行進

ブラティスラヴァ世界絵本原画展一広がる絵本のかたち

特集展示 | 斎藤義重 1980年代以降を中心に



6月3日から7日まで、ポーランドのワルシャワに行ってきました。同地で開催された国際シンポジウムに参加するためです。この会議では、法政大学とスイスのチューリッヒ大学との共同研究プロジェクトである「ヨーロッパの博物館・美術館保管の日本仏教美術コレクションと日本観の形成」と題する研究にかかわる報告や討論が行われました。

会場となったのはワルシャワの市街地から自動車でおおよそ40分ほど離れた、人家もまばらな、緑豊かな自然に包まれた敷地内に赤い屋根に白い壁という潇洒な佇まいの建物が幾棟か点在する、ホテル・パラッツ・ロッホブでした。現地の共催研究機関はポズナンのアダム・ミキエウィチ大学で、同大学東洋学科のカーネルト教授以下、その助手や大学院生たちの全面的な協力を得て、周到な準備と配慮の行き届いた会議の運営によってシンポジウムは滞ることなく進行し、4日間にわたる会議は充実したものとなりました。

参加者は40余名、うち26名による研究発表や報告がありました。開催地がポーランドということもあり、ロシア、チェコ、ラトヴィアなど、いわゆる東欧圏の美術館からの参加者も少なくなく、これまであまり情報を得る機会が多く無かったので、彼らの報告をとりわけ興味深く聞くことが出来ました。無論イギリス、フランス、ドイツ、スイス、スペイン、イタリア、スウェーデンなど西欧圏からの多彩な報告もあり、意義のある会議でした。

ところで、ヨーロッパにおける日本美術の鑑賞や蒐集といえば、すぐに浮世絵を思い浮かべる方もおられるでしょう。たしかにヨーロッパの美術館・博物館には多くの浮世絵が収蔵されており、今回の会議でもそのことに触れる報告が幾つもありました。ヨーロッパに一定の目的をもってまとまった数量の浮世絵を持ち込んだのは、19世紀の前半に、長崎のオランダ商館付医師として二度来日したドイツ人医師のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトであったとされています。彼は浮世絵に限らず、多くの、今日でいう日本の美術作品を持ち帰っています。しかしそれらの作品に対する彼の目は、それを美術と捉えるより、むしろ人類学的、民族学的あるいは民俗学的な資料と見ることの方に大きな関心があったと言われています。

一方、ロンドンの大英博物館収蔵の日本絵画の中核をなすアン

ダーソン・コレクションは、19世紀後半に日本にやって来たイギリス人医師ウィリアム・アンダーソンが6年間の滞在中に蒐集したものです。彼もまた、日本の情報を自国に持ち帰らねばというある種の使命感からであったようで、日本の絵画に関心をもったが、美的な感動に基づくものではなく、いわば標本的に収集したのだとする報告があります。

浮世絵に芸術性を認めたのは、19世紀のパリで活躍した印象派の画家をはじめとするジャポニゼーションたちであり、彼らと浮世絵の出会い、日本から輸出された陶磁器の詰め物などとして紙くず同然の扱いをされていたそれに美を見出したことに始まる、という話がいまなお広く知られているようです。しかしこの言説に対しては、再検討の必要があるという考えがわたしにはあります。そのことを数年前にパリで開催された浮世絵展の講演で話したところ、講演後、フランスでジャポニズム研究を行っておられる老婦人研究者が「あなたの言う通りです。この俗説は、浮世絵の美の発見者とされる版画家、ブラックモンが亡くなった後に生まれたのです。」と教えていただきました。

明治期に浮世絵をはじめ多くの美術工芸品がヨーロッパに輸出されたのは、万国博覧会参加の経験から、西欧に伍して競える近代国家の設立を目指す明治政府が、殖産興業の振興を国策として多くの美術工芸品を生産し、その輸出に力を入れ、同時に浮世絵に限らない多くの古美術品の輸出にも努めたからといえます。つまり、自国の歴史、文化の優秀性、その文化的伝統に内包する重みといったものを伝えることが、欧州列強に対して日本の存在を認めさせる早道と、当時政府の中枢にいた伊藤博文や井上馨など欧州に留学経験のある政治家たちは考えたようです。その目論見はある程度成功したものと思われます。そしてそこに、ヨーロッパにおける日本観の成立もあったといえます。美術の果たした役割は、決して少なくなかったのです。

日本人の気付かなかった美、芸術性を欧米人が発見してくれたといった、いわば受身的な解釈ではなく、その美術的、文化財的価値を認識した上での日本からの積極的な送り込み、能動的働きかけがあつてこそ、かくも高いヨーロッパでの評価があつたという視点で、日本の美術をもう一度検討してみる必要もあるのではないかと、いまわたしは考えているのです。

〔館長 河合正朝〕





日本美術には古来実に多くの動物たちが表現されてきました。それはさまざまな動物との暮らしの中での関わり合いを表すばかりでなく、あるいは怖れ、崇め、愛玩し、役立ち、好奇・・・などの動物へ対する人々の感情を具体的に伝えてくれます。日本美術の格好の題材でありつづけた動物には豊かな作例があり、千葉市美術館のコレクションもその例外ではありません。そこで、間口が広い夏休みの特別企画として、動物をテーマとした展覧会を開催します。

その名も「どうぶつ大行進」。この夏、千葉市美術館はまさに「どうぶつだらけ」となります。「動物とのつきあい」「託された吉祥のイメージ」「どうぶつと遊ぶ」「どうぶつデザイン」「水の中へ！」など、いくつかの大きなテーマをたどりながら、動物表現の5W1H・・・いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どんな風に・・・を探ってみましょう。俵屋宗達、喜多川歌麿、葛飾北斎といった江戸の絵師から、吉田博、棟方志功ほか近代版画の名手たちほか多数による、犬、猫、虫や鳥、象やライオンなど古今の多彩な動物イメージがぞくぞくと登場します。展示総数約200点。千葉市美術館コレクションの意外な一面もお楽しみいただけることでしょう。ではそのいくつかに触れながら、概要を紹介します。

まずはプロローグとして、動物画の華、屏風など的大作群に行進してもらうことにしましょう。いろいろなタイプの作品があります。それぞれについて、「5W1H」を意識しながら観てみるとどうでしょうか。

例えば、シカの絵です。この夏は、千葉県立中央博物館で「シカとカモシカ」展が行われるに伴い、「シカ探調査隊」なる観察シートを持って、千葉市科学館、千葉市動物公園、県立中央博物館の3館園を回ろうという企画が進行中です。美術館のシカを描い



(図1) 森狙仙《双鹿図屏風》天明8年(1788)
千葉市美術館蔵

夏休み特別企画

どうぶつ大行進

江戸時代から現代、
美術のなかの動物たち

た作品にも俄然、目を注がれようというところですよ。10点近く展示しますので、絵の世界ではどんなところにいるのかその姿を追ってみましょう。江戸時代の大阪の絵師、森狙仙(1747-1821)による《双鹿図屏風》(図1)には、柏檣のもとにいる雌雄のニホンシカが描かれています。つぶらな瞳や体の感触も伝わるような毛の表現に眼を奪われ、さすがに動物画の名手などと感心もしますが、例えば角は実際はここまで複雑に枝分かれしないらしく、三叉四尖とも違い絵師が描く際の抛り所としたものが他にあったようです。ではこの時代、誰が何を求めてこのようなシカの絵が描かれたのか。今回は動物がテーマということで千葉市動物公園とも連携し、お話をきく機会があります。シカについてもさらに多くの視点でご覧いただけることでしょう。会場ではほかにも「奈良のシカ」や洗練されたシカのデザイン、「トナカイはシカの仲間！」(シカ探調査隊の合言葉とのこと)のトナカイ図なども見ることができます。

本展で取り上げる作品は、コレクションの特徴を反映し江戸時代の絵画・版画が中心となりますので、「動物とのつきあい」として、牛や馬、犬猫、鳥や虫のいる情景のさまざまをご覧ください。こんなところに！と探してみてください。その際本展のチラシもお手元に。明治時代の双六(図2)に想を得て、どうぶつを探しながら会場内をめぐるシートにしてみました。単純に探すだけのものですが、かなり手ごたえがあると思いますがいかがでしょうか。見事上がった方へのプレゼントも鋭意準備中です。

また、「託された吉祥のイメージ」ということで、特定のどうぶつ(ここでは主に鳥)が、特定の意味を担って受け容れられていた、江戸時代花鳥画の多数の例を見ます。鶴亀が持つおめでたいイメージは、現代も変わらずわかりやすいものです。孔雀の圧倒的なゴージャス感も



(図2) 桜齋房種「動物第一 獣類一覽双六」明治15年(1882)頃
青木コレクション(当館寄託)



(図3) 岡本秋暉《孔雀図》
嘉永6年(1853)
個人蔵(当館寄託)

好まれ、絵師の腕の見せ場でもあり大いに描かれました。岡本秋暉^{おかもとしゅうき}《孔雀図》(図3)などはその代表的なものです。迫真の描写が輝きを放ち、それに立身出世、長寿、富貴、多産、子孫繁栄、などの吉祥性が備えられ、多くの支持を得ました。

江戸時代も半ば頃になると、描かれた動物に感情豊かな何やら人間に重なるような表情を持つ作例が現れるようになり記憶に残ります。見方に賛否あるかもしれませんが、感情移入できるとは優れた作品の性質の一つといえましょう。そんな名作を集めてご覧いただけます。また、海外からの新奇なものへ寄せる関心の最たるものは、古今東西、動物でありました。日本では権力者が示威行為として珍しい生き物を飼育し一般に見せるということが少なかったと言えるようで、特に哺乳類は少なく、単発的に

見世物とされてもそれは霊験やご利益をもたらすものでした。森一鳳《象図屏風》(図4)にもそれをうかがうことができます。来日のたびに大変な騒動となってきた象のほか、そうした関心や経緯を示す珍しい動物画も展示します。

文化により「動物」のカテゴリーは変化しますが、本展にいう「どうぶつ」とは狭義^{けもの}の獣ではなく、これまで触れたように鳥や虫、そして魚類も含んでいます。日本最初の動物園には「観魚室」^{うおのぞき}もありました。水族にからむさまざまな表現は、時代を超えて一部屋に集めてみることにします。例えば水中世界への関心や空想・幻想のあらわれから、食材としてまで、日本美術の「けもの」モチーフとは違うありように、あらためて気づかされます。

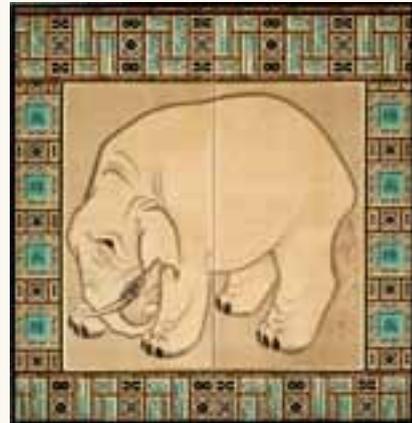
このほか、近代版画の多様な表現のなかでの動物モチーフは、年賀状の十二支の動物が思い浮かぶように最も親近感を持ってご覧いただけるものかもしれません。個性的な版画家たちはどのようにそれを料理して自らの版表現を示し、広げたのか、「版画動物園」と「どうぶつデザイン」のコーナーもバラエティに富む本展のみどころとなるでしょう。



夏の企画として動物に関する催しを行うのは、新春に干支の動物を取り上げると同じくらい、昨今ではちょっとした定番となっている感もあります。魅力的な館蔵品を生かし「蔵の深さ」を示した他館の企画も記憶に新しいところです。館蔵品で展覧会を行う定番のテーマ…そのことこそ動物を題材とする美術の作例が豊かで、優れたものが多いことの証です。当館所蔵品の人気者もまた多くは動物画。(ですので前後の都合で出品できない作品があることも予めお断りしておきます。)動物の中で一番集客力があるのは何と言っても猫だとか。一方「人気がありそう」でいて、だからどこでもやるけど、意外と(お客さんが)入らな

いんだよ」…実はこれもまた動物テーマの展覧会の周辺でよくささやかれる言葉です。さてさて、「霊獣たち」として架空の動物まで幅広く取り上げる千葉市美術館の「どうぶつ大行進」展。いかなるものとなりますか、乞うご期待、です。

[学芸員 松尾知子]



(図4) 森一鳳《象図屏風》江戸時代 千葉市美術館蔵

関連イベント

- コンサート(※往復ハガキによる申込制/7月25日必着)
「パロック室内楽コンサート ～どうぶつ大行進にやせて」
リコーダーの巨匠エヴァ・レジェーヌ氏と室内楽メンバーをお迎えします。パロック時代の器楽演奏の妙技による動物描写をお楽しみください。
8月4日(土)14:00より/さや堂ホールにて/定員150名/参加無料
演奏:エヴァ・レジェーヌ(リコーダー)、村石達哉(ヴァイオリン)、宮澤等(チェロ)、牧真之(チェンバロ)
- ファミリープログラム(※往復ハガキによる申込制/7月20日必着)
「箱庭どうぶつえんをつくろう」
お気に入りの空き箱を利用して小さな動物園をつくります。
8月5日(日)13:30~16:00/11階講堂にて
対象:小学1~3年生の子どもとその保護者10組20人
参加費:200円/組
※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください
千葉市動物公園との連携企画~美術館で動物のお話~
- 関連講演会「キャンパスの中の動物たち」
講師高木淳子(千葉市動物公園飼育課長)
8月18日(土)14:00より(1時間程度)/11階講堂にて
先着150名/聴講無料
- ゲストによるギャラリートーク
8月3日(金)14:00より/8階展示室にて
聴講無料(展覧会の入場券が必要です)
講師:並木美砂子(千葉市動物公園飼育課)
- 中学生のためのギャラリートーク '12
7月27日(金)、28日(土)10:00~15:00随時受付
8階展示室にて/参加無料/各日30名程度(所要時間30~40分)
子どもだけでの来館と鑑賞をサポートします。



夏休み特別企画 どうぶつ大行進

2012年7月14日(火)▷9月2日(日)

[休館日] 8月6日(月)

[観覧料] 一般200(160)円、大学生150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

XXIII. Bienále ilustrácií Bratislava Slovensko ブラティスラヴァ世界絵本原画展—広がる絵本のかたち

◇特別展示：日本のしかけ絵本

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」は、スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァで開催されるイラストレーションのビエンナーレで、1967年の初回以来、BIBの愛称で親しまれてきました。日本では、コンペティション部分の紹介ということで「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」としてありますが、ビエンナーレ全体では、原画展を核としてワークショップやシンポジウムなどの多彩なイベントが用意され、世界中から絵本やイラストレーションに関わる人たちが集まる機会となっています。

当館では、2005年、2008年、2010年(それぞれ、BIB2003、2007、2009に該当)と過去3回にわたって紹介してきましたので、おなじみの方もいらっしゃるかもしれません。今回は、2011年秋に開催された第23回展の中から、グランプリをはじめとする受賞者の作品、日本からの参加作品をご覧いただくほか、来年2013年に外交樹立20周年を迎える、地元スロヴァキアの作家にもスポットを当てます。

コンペティションには各国から原画とその絵本が送られます。第23回展には44カ国から458冊の絵本とその原画2,381点が集まりました。これらの審査にあたるのは、出身国の異なる10人の審査員で、今回はそのうちの半数をイラストレーターが占めていました。ほか、編集者や図書館員、研究者など、子どもの本に関わる専門家たちにより、4日間にわたる審査が行われました。

グランプリを獲得したのは、韓国の若手イラストレーター、チョ・ウンヨンでした。1981年生まれこの作家のデビュー作となる絵本『はしれ！トト』は、2009年のポローニャ国際絵本原画展でフランスの出版社の目にとまり、まずフランス語版が世に出て、その後、韓国国内でも出版されました。2011年のブラティスラヴァでは、原画とともに韓国語版が出品されていましたが、今回は、フランス語版もあわせてご紹介します。本そのものの違いだけでなく、画面に入るテキストの言語の違いが、どのように感じられるでしょうか。お話の舞台は、なんと競馬場。内容についてはここ

ではお話しませんが、本の中には、疾走する馬たちの姿をダイナミックにとらえた場面だけでなく、それとは対照的に、大穴を狙うぎらついた目や、紙クズとなった馬券を握りしめて落胆する、やさぐれた大人たちの姿も登場します。舞台設定の意外さ・自由さだけでなく、登場する馬たちのキャラクターづくりと表情を描き分ける技量や、その型破りな制作方法に驚かされることでしょう。彼女の快挙が象徴するかのように、近年、韓国の絵本の勢いはとどまるところを知らず、今回のBIBでも、グランプリの他にもう1人受賞者を出しています。



シモーネ・レア『イソップ物語』より 2011年 ©Simone Rea

金のりんご賞、金牌の受賞者はそれぞれ5人で、計10人の作品をご覧いただけます。金牌を受賞したイタリアのシモーネ・レアが『イソップ物語』のために描いたイラストレーションでは、原作の物語にこめられた人間社会への皮肉が視覚化され、独特の緊張感の中から見事に伝わってきます。この日本でも馴染み深い寓話集は、本展覧会では他に2つの異なる本から原画を展示しますが、イラストレーションによって全く異なる物語のイメージをお楽しみいただければと思います。



チョ・ウンヨン『はしれ、トト!』より 2010年 ©Eun young Cho



ペテル・ウフナル『ピーターパン』より 2007年 ©Peter Uchnár

日本からは13人が国内選考を経て参加しており、その中から、今井彩乃(いまいあやの)が、『くつやのねこ』の原画(本紙表紙に図版掲載)で子ども審査員賞を受賞しました。これは、たいへん意味のある賞で、スロヴァキアの子どもたち(今回は当時9才~14才の6人)によって選ばれます。BIBの運営の中心となっているのはスロヴァキア国際児童芸術館(BIBIANA)ですが、このビエンナーレが何よりも子どもと子どものための文化を真剣に考える大人たちのためにあるという基本姿勢が、こういった賞の設定にもあらわれているといえます。繊細なタッチで、柔らかな猫の毛の質感が手に取れるような画面、つい引き込まれるような表情。この作品の神秘的な美しさや色づかいがスロヴァキアの小さな審査員たちの心をとらえたといわれています。

ちなみに、前回(BIB2009)の子ども審査員賞を受賞したのは、スロヴァキアのイラストレーター、ペテル・ウフナルでした。ウフナルは、ドゥシャン・カーライに学び、今やスロヴァキアの中堅層を代表するイラストレーターとして、BIB2011のワークショップの指導者もつとめています。本展では、J.M.バリーによる『ピーターパン』のためのイラストレーション等をご覧いただきますが、ダイナミックな構図と線描による緻密な細部描写に加え、私たちに訴えてくるのは独特の色づかいではないでしょうか。スロヴァキア作家の特集部分では、ウフナルを含む11人のイラストレーターを紹介します。

日本からの参加作品も、たいへんユニークなものばかりといえるでしょう。BIBへの参加の条件として、近年出版された本であることが求められるため、私たちにとってもなじみ深い作品が登場します。書店で手に取る絵本からはなかなか想像できませんが、本になる前のページの様子やイラストレーターが駆使する制作方法が、いかに多様で複雑なものであるかということも、今回の展示を通して感じていただければと思っています。そして、原画な



大畑いくの『そのらのおっばい』より 2007年 ©大畑いくの

らではの力強さも、見どころといえます。

展覧会の後半では、特別展示として、日本における絵本の造形性に焦点を当て、仕掛け絵本を中心に、明治時代から現代にいたる様々な絵本のかたちをめぐりながら、その多彩な魅力を紹介します。洋の東西を問わず、子どものための絵本という場を借りて、新しい造形表現が積極的に試みら

れてきた歴史があります。2次元の視覚表現を基本とする絵本において、画面の奥行きや立体感、動きの表現は、昔から制作者に挑戦を求めてきました。ページをめくる、という基本的な作業に加えて、劇的な場面転換の仕掛けとしての観音開きや、ポップアップ、視覚を利用したトリックなど、小さな画面に様々な工夫が凝らされてきました。今回は、「うごく」「かわる」「とびだす」の三つの視点から、これらの取り組みについて考えてみます。



『四十二変化 公園と郊外遊び』1915年
札幌市中央図書館蔵

BIBでは、その時々によさわしい課題をテーマとして取り上げ、シンポジウムが行われていますが、2011年のテーマは「イラストレーションと新しいメディア」でした。表現の幅を広げるため、絵本制作の現場では他の分野の手法も積極的に取り入れられています。シンポジウムでは、電子書籍やアプリ本などの新しい絵本のかたちについて関心が寄せられたほか、コンピューターを使った制作についても様々な視点から論じられました。とはいえ、今回の展示でご紹介する仕掛け絵本に見られるのは、むしろ作り手の発想力と手仕事の魅力といえるでしょう。結果として、かなり盛りだくさんの内容となりましたが、この展覧会全体を通して、表現媒体としての絵本がもつ豊かさをお伝えできればと思います。

[学芸員 山根佳奈]

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 ー広がる絵本のかたち ◆ 特集展示：日本の仕掛け絵本

2012年9月8日(土)▷10月21日(日)

[休館日] 10月1日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円、大学生 560(450)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード:36271)、セブンイレブン(セブンコード:

018-324)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(10月21日まで)にて販売

※10月18日(火)は「市民の日」につき無料開放

特集展示 |

齋藤義重 1980年代以降を中心に

SAITO YOSHISHIGE

齋藤義重氏をめぐる思い出

齋藤義重氏(1904-2001 以下敬称略)について、思い出す個人的なできごとがある。

1980年代の半ば、大学の恩師と話をしていた時のこと、

— 考えてみたら、劉生がまだ生きていてもおかしくはない。と、いう話になった。

梅原龍三郎(1888-1986)や中川一政(1893-1991)が現存だった頃のこと。中川は画家としても健在で、たしかNHKのドキュメンタリーで野外制作を織り込んだ番組が放映されていた。岸田劉生(1891-1929)が生きていたら、当時九〇代の半ばである。

四〇を迎える前に死んでしまった劉生のその後を想像するなど、他愛もない話かもしれない。画業の半ばで仆れた者は、時として彼が生きた時代そのものを道連れにする。その意味で、劉生の死は大正時代の美術の終わりですらあった。果たして劉生が昭和という時代をどのように生きることができただろう。これは、後に残った梅原たちが劉生から受け継ぎ、取り組まなければならなかった「日本の洋画」をめぐる構想を問い直す端緒となる。

私たちが、劉生がまだ生きていたら、という話をしていたのは、齋藤が東京都美術館をはじめとする大きな回顧展を済ませ、新作としていくつもの立体作品を発表した後のことだった。

— 東野(芳明)さんがさ、

と、師は続けた。

— 「絵筆を捨てなかったマルセル・デュシャンはジャスパー・ジョーンズである」だなんて、格好つけて云ってるけど、俺に云わせれば絵筆を捨てなかった齋藤義重は鳥海青児よ。

鳥海青児(1902-72)と齋藤は共に、制作のあゆみのはじまりに劉生の作品との出会いがあった。鳥海は油絵具の物質性に苦悶した劉生を受け継ぎ、カンヴァスに絵の具の層を重ねては削ることを繰り返し、対象の存在そのものを描こうとした。一方、齋藤は従来のカンヴァスと油絵具による「絵画」と決別し、新しい造型に取り組む、その中で「あるてふ(あるという)ことの不思議さ」を追求している。

齋藤の1980年代以降の作品。その多くは、黒い板を組み合わせることで成り立つ、いわゆる立体である。板の集まりは絵画で云うところの「図」であり、作品が設置された壁あるいは周囲の空間は「地」に相当する。

問題は、「図」よりも「地」の部分である。

鳥海のような絵画であれば、「地」もまた絵具によって構築されなければならない。齋藤の場合はどうか。私が初めて氏にお会いしたのは1990年代に入ってからのことだったが、この点についてしばしば次のように語っていた。

— 私が板を置くでしょ、そうすると、その空間は前とは全然違



齋藤義重氏 千葉市美術館にて 1996年7月29日 (撮影: 内田芳孝)

いますね。それまで板は無かったんだから。

齋藤のこの発言は、正確ではないことをお断りしておくが、板の組み合わせによる「作品」だけではなく、それが存在する「空間」そのものをも作っているのだ、ということになる。立体の周囲は「何もない」わけではない。

劉生についての話題を氏に何度かおたずねしたこともあった。

— ええ、会いました。

ごく簡単に、展覧会場の外で会ったとか、そのような事は語って下さったけれども、彼の絵画と自分の制作とは異なると強調された。会った時だけではなく、その後電話でも言われた。大きくはないがやや甲高い声は、話された以外のなにごとをも付度させない雰囲気があった。

その発言を聞いた直後は強い違和感を抱いたけれども、ほとんど時間差のないまま「新作」に接し、あるいは著作を読み、画家本人と言葉を交わした経験を有する、という意味において齋藤は自身の劉生を知っていたことは事実だが、劉生が体験することがなかった分厚い時間を生きた人間である。そのことに思いが及ばなかったこちらは迂闊というよりも非礼だった。今はただ不明を恥じるばかりである。

1995年の正月明け、NHK教育テレビで小説家・^{はにやゆたか} 埴谷雄高(1910-97)の番組を見た。質問に答える小説家の顔は齋藤に似ていた。特高にいじめられると顔も似るのかなどと考えていた時、何の脈絡もなく文楽の人形遣い初代吉田栄三(1872-1945)のポートレイトを思い出した。この時から今日まで、私の記憶の中にある齋藤の風貌は、吉田と二重写しになっている。

土門拳(1909-90)が撮影したその写真は、グッと全身に力を入れて人形を持ち上げる、小兵できかん気の強そうな人形遣いが、何も無いはずの舞台の中空ただ一点を見つめている。

[学芸係長 藁科英也]

特集展示 | 齋藤義重 1980年代以降を中心に

2012年9月8日(火)▷10月21日(日)

[休館日] 10月1日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、

および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※同時開催「プラティスラヴァ世界絵本原画展」入場者は無料

ハワイは千葉市美術館と深いかわりがある！浮世絵の取り持つ縁！浮世絵ではメトロポリタン、ボストンに次ぐ第3位の実力のホノルル美術館。そんな土地に単身留学(絵の関係ではありません)を決意し、千葉市美術館のボランティアの仕事を中断して早半年。こちらホノルル美術館のボランティアの仕事や観賞教育に興味はあるものの、これまではゆっくり観賞するゆとりがありませんでした。しかしそんな中で気付いたこともあります。まず一つ目はコンテンポラリーミュージアムがホノルル美術館に寄贈されて一緒になったこと。次はトロリーバスの停留所が目の前にあること。それから「友の会」のようなメンバーになると1年間有効なポスター引換券が付いてくること。また私の念願の「ハンズオン」の遊びと教育のエリアもあります。

ところで私にとって美術館は小学校時代には記憶がありませんが、中学生以降は色々な機会があったように思います。そんな中、新婚旅行の時に立ち寄った初めてのルーブル美術館の感動は、その後、事あるごとに日本と西欧との違いを思い起こさせます。それは美術館と市民との距離です。世界のルーブルには名画を日常の一コマとして普段着で観賞している小学生の集団の姿がありま

した。そこにはまた名画を模写している若い画学生の姿もありました。「美術館をもっと子供や学生に身近に！」。それはまた「大人も気軽に利用できるように！」との想いでもありました。

しかし、その想いと同じことが既に千葉市美術館で始まっていた！先輩からそんな情報を受けると直ぐにボランティアに応募し、昨年の「ボストン美術館浮世絵名品展」から観賞教育リーダーでデビューしました。しかし限られた時間と枠組みの中でのリーダーの仕事はなかなか手ごわいものです。色々な発見、感動、そして失敗も少なくありません。しかし「子供たちに美術館を身近に！」の点では成功です。せつかくある市民の貴重な財産、もっと生かして使いたい！

[千葉市美術館ボランティア 杉山繁雄]



コンテンポラリーミュージアムの庭からの景色

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

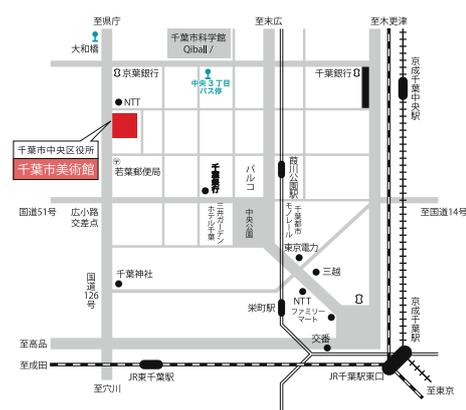
今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

- 第4回 8月11日(土) 「江戸時代の動物画～『どうぶつ大行進』の謎4題～」
[講師] 松尾知子(当館学芸員)
- 第5回 9月22日(土) 「斎藤義重の思い出」
[講師] 藁科英也(当館学芸係長)

[時間] 14:00より(開場は30分前) [場所] 11階講堂 [定員] 先着150名(入場無料)

◎編集後記

今号はまさに「どうぶつ」だらけの紙面となりました。「どうぶつ大行進」はもとより、「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」にも多くの動物が登場します。「斎藤義重」展は当館では約10年ぶりの展覧となります。お見逃しなく。新たに掲載しました館長エッセイも、今後をお楽しみに！



[開館時間]

10:00 - 18:00 (毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
- ◎バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて
「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.cma-net.jp/>
[発行日] 2012年7月9日
[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

